

コミュニティの再建をめざした心理的支援
 田野畑村におけるチーム「バラ作戦」の経過報告

被災地支援におけるアクション・リサーチのプログラム評価をめざして

大橋 智* 田村 友一** 中村 有***
 高下 梓* 黒岩 誠****

本報告では、3年目を迎えた岩手県下閉伊郡田野畑村における被災地支援活動について、戸別訪問(バラ作戦)・心理教育(講演会)・コミュニティ再建支援(食事会)で行った。戸別訪問では、全村を対象とした活動を行い、全村1300世帯にバラを手渡しした。講演会では、自殺予防を目的とし、リラクゼーションのワークなどを行った。食事会では、非日常世界を演出し、郷土料理などを振る舞った。各活動において回収された質問紙の結果からは、好意的な評価を得ているものの、世代間のニーズの差異など課題も明らかになった。

キーワード：被災地支援、アクションリサーチ、プログラム評価、田野畑村

問 題

岩手県下閉伊郡田野畑村における被災地支援活動は、2013年で3年目を迎えた。今年は村の要請もあり被災地域だけでなく、全村を対象とした活動を行うこととなった。これまで本活動に用いてきた象徴としての「バラ」に、被災を忘れていないというメッセージと、物理的にも社会的にも分断されつつある田野畑村を今一度繋ぎ直したいという願いを込めて、全村1300世帯にバラを手渡しすることを目的とした。過去2年間かわりのある被災地域だけでなく、山間部などの可視的な被害のない地域(田村・高下・平田, 2012)からも、比較的好意的に受け止められたと考えている。

食事会などのイベントもこれまでと同様に開催し、離れて暮らすコミュニティの方々の接点として、また気軽に相談や雑談のできる場として提供された。その他、2年目からメンタルヘルスに関する講演や、村の対人援助職への具体的な支援など、心理専門職としての直接的、間接的な支援が展開できるようになってきており、少しずつではあるが、村民にその存在が認知されつつあることを実感できる3年目であった。

一方で、これまでコミュニティの再建を目的にしてきた本活動のプログラムが、具体的にどのような効果

があり、より効果が期待できる対象がどのような属性を持つのかといったプログラム自体の評価は十分とは言えない。またプログラム自体の規模やコストの問題、臨床的意義の検討などの諸問題も先送りにされてきており、効率的に運営されてきたといえない部分も多い。そのため、特に2年目の活動はその目的や内容がややあいまいなまま実施されたと言わざるを得ず、1年目に比べ活動の意味づけが困難になってきている面も否定できなかった。今後の継続的な支援において、そのあり方を検討し、村のニーズに合った支援を、コミュニティの文化に浸透させていくための明確で効果的な支援プログラムの見直しが求められている。

そこで本論では、過去2年間の支援経過を提示しつつ、2013年度の支援活動で得られたわずかな質問紙データをもとに、今年度の支援プログラムを報告し、来年度以降の活動プログラムにおける課題を明らかにすることを目的とする。

田野畑村における被災・支援の経過

田野畑村は岩手県沿岸北部に位置する、人口約4300人の村である。2011年3月11日に起こった東日本大震災において、24名の方が亡くなり、15名の方の行方が分かっていない。被災住宅数は281棟、被災世帯数は251世帯で、被災者数は734名に上る。他地域と同様に津波による被害が中心だが、リアス式海岸特有の地形による被害が顕著で、浜から谷に向かって波が押し寄せたため、浜からの距離ではなく、海拔によって同じ地域の隣接する家屋でも被害の状況が異なるとい

* 明星大学人文学部心理学科

** 明星大学総合健康センター

*** 東邦大学医療センター大橋病院

**** 明星大学総合健康センター／明星大学人文学部心理学科

う状況が生まれていた。また浜側に集中していた漁業や観光などの産業・資源は壊滅的な被害を受けた（被災状況及び田野畑村の現状は、田村ら（2012）に詳しい）。

復興に向けた様々な行政的支援、多くのボランティアによる物的・人的支援が進む一方で、元来メンタルヘルス過疎ともいべきこの地域には、メンタルヘルスに関する資源はほぼ無いに等しい状況であった。実際にこの3年間で5名の自死者が出ているが、マンパワーを含めた資源の不足によって、必要なところに必要な支援が届いていない。震災後初めての夏に心理支援を目的に入村した筆者らが体験したのは、中村・木村・黒岩（2012）が言うように「必要とされている、しかし、どう対応できるのか」という困惑」だけだった。歴史的に凝集性の高いコミュニティを持つ田野畑村に外部の、それもメンタルヘルスの支援者が入り込む間隙はどこにもないように思われ、そればかりか、強固な自助・共助のつながりで維持されているこのコミュニティに対して、むやみに提供する心理支援は侵襲的に受け止められ、被災の傷を大きくすることになるとさえ思われた。

そこで、喜多・黒岩・廣池・岩崎・久保（2012）をはじめとする有志チームは、この現状を分析し、これまで蓄積された臨床知見を土台にするものでないとしても、一般的な心理支援にとどまらない支援を試み、それを田野畑村独自のメンタルヘルスのシステムへと昇華させていく長期的な支援システム構築の道をアクション・リサーチとして模索し始めた。その中心が、被災者への「バラ配布」とファンタジックな空間を演出した「食事会」の開催であり、これらは非日常体験とコミュニティの再生、あるいは再会がその主な目的であったが、ある対象にはそれが生きる活力や日常生活の癒しとして体験され、想定以上の反応を得た。

資源の少ない田野畑村にあって、自助・共助の土台をより効果的な形で機能させる支援システムは、それを含有したコミュニティの再構築にその活路があると考えられ、このコミュニティ再構築の試みは、その後の支援の中心的な目的とされた。

こうして少なくとも危害を及ぼす存在ではないことが認知された1年目を終え、2年目以降は村からの要請もあり、メンタルヘルスに関する講演会や、仮設住宅のボランティア相談員に対するコンサルテーションなどの、より具体的で実際的な心理支援のプログラムも導入していくこととなった。

以下に今年の活動流れと、現地での直接支援の概要を示す（Table.1, Table.2）。

Table. 1 2013年の活動の流れ

月	チームの活動
1月	2012年の活動の反省及び総括と、2013年の活動に関するチーム内ミーティング
2月	現地保健センターと電話での打ち合わせ（予算、来年度の活動内容等）、及びチーム内ミーティング
3月	全村へ詩と大学付属幼稚園の園児によるバラの絵の配布
4月	本年度活動内容についてのミーティング（随時保健師とは電話にて打ち合わせ）
5月	チーム編成、予算の振り分け等
6月	活動内容、期間等の仮決定
7月	現地視察（戸別訪問ルートの下見）、保健師らと現地ミーティング、村長へのあいさつ
8月	入村。約1週間の現地活動（バラ配布、講演会、食事会、相談員支援等）
9月	活動の振り返りと次年度に向けてのミーティング
12月	代表者（黒岩）が入村、来年度に向けた現地ミーティング

Table. 2 現地活動内容

8月20日	先発隊入村。あいさつ回り、ベースキャンプ整備、活動準備
8月21日	バラ配布準備、保健センター等各所打ち合わせ
8月22日	バラ配布（心理専門職、アシスタント、学生数名からなる6班に分かれ、配布）
8月23日	バラ配布（心理専門職、アシスタント、学生数名からなる6班に分かれ、配布）
8月24日	バラ配布。講演会、イベント準備。各所打ち合わせ。準備機材搬入。
8月25日	9：00～講演会。11：00～食事イベント・相談会開催。15：00～仮設住宅相談員訪問相談。片付け。
8月26日	10：00～仮設住宅相談員訪問相談。ベースキャンプ清掃片付け。帰京。

方 法

支援プログラム概要

戸別訪問プログラム（バラ作戦）：全村、全戸（1300世帯）へのバラ配布を目的とした。田野畑村は大きく分けて、山側の住宅、海側の住宅、村の中心を縦断する国道に沿った中心地に近い住宅の3ブロックで構成されているため、臨床心理士、心理学科学生など5～6名からなる全6班で、それぞれの分担地区を1軒ずつバラ1輪を手渡しした。点在箇所が多く、また地理的にも訪問自体が初めてであった山側の住宅に人員を多く割り、国道沿いは全員で一斉に配布していく方法を取った。各班に長となる心理士を配置し、その管理のもと学生による配布が中心となった。また、訪問時にはバラと同時に食事会イベントの招待状と質問紙、講演会の案

内を手渡し、直接声掛けをした。

心理教育プログラム（講演会・相談員支援）：講演会は村の保健センターを会場に行われた。講演の目的は、被災後3年目に起こりうる心身の状態や変化について知り、その対処を体験してもらうことだった。ストレスとストレス反応、ストレスマネジメントについての知識を共有した後、リラクゼーション法などの実際的なワークも取り入れながら行われた。

また、仮設住宅は2012年の訪村時点で、3か所残っており、そのうち2か所にボランティア相談員が常駐していたが、この相談員も被災者であり仮設住宅で生活をしているため、「今困っていること」について聴き、相談として受けることを基本方針とした。村の保健師に事前に聴取してもらった相談員の訴えに対応可能な心理士を選定し、臨床心理士2名、記録係として大学院生2名の基本構成で訪問した。心理職の専門家による知識の提供や共有、コミュニティの見立てやアドバイスなども提供された。

コミュニティ再建プログラム（食事会）：1年目から継続している食事会については、基本的な目的や構成は変えずに行った。主な目的は非日常体験の提供と、コミュニティ再会の場としての提供であり、カタルシスや癒しの効果を期待している。また子供たちには参加して楽しめることを中心に、運動等の発散的な遊びや、お絵かき等の表現型の遊び、もの作り等の作業系の遊びの3種を提供できる構成とした。また、今年からはイベント会場を仮設相談会場とし、相談受けることのできる心理士とボランティアの学生との区別がつくような工夫をし、イベント内での相談というより自由度の高い相談窓口を設定した。

提供した内容は以下の通りである。

飲食：郷土料理（はちはい汁、きみだんす）、流しそうめん、ピザ、パンネ、クレープ、タピオカ、田野畑牛乳、ソフトドリンク各種、アルコール飲料各種

遊び：大道芸、クラフト飛行機、ハンモック、ブランコ、バスケットボール、リボンのバラ、うち作り、お絵かきコーナー、シャボン玉

調理については基本的に村の栄養士と、「食改さん」と呼ばれる村の婦人会によるボランティアに担当してもらい、食改さんには食事を提供する側としてイベントに参加してもらった。

調査方法

戸別訪問プログラム（バラ作戦）：戸別訪問の際に各戸にバラとイベントへの招待状とともに、事後回答を郵送する質問紙を配布し、郵送式調査を実施した。郵送

式調査では、①年代、②性別、③自由記述欄を設け、回答を求めた。戸別訪問時に配布した質問紙の回答者は、26名であった。回収率は、2%（1300世帯換算）であった。

心理教育プログラム（講演会）：講演会会場において、質問紙と回答記入台を会場出入口に設置し、留置き調査を行った。留置き調査においては、①年齢、②居住地域、③参加の契機、④活動の満足度、⑤自由記述欄を設け、回答を求めた。講演会の参加者数は、32名であった。留置き調査の回収率は、56.25%（18名）であった。

コミュニティ再建プログラム（食事会）：イベント会場において、質問紙と回答記入台を会場出入口に設置し、留置き調査を行った。留置き調査においては、①年齢、②参加の契機、③活動の満足度、④自由記述欄を設け、回答を求めた。「食事会」の参加者数は、入退場者の人数から83名であった。アンケートの回収率は、32.53%（27名）であった。

分析方法

年齢や参加動機については、回答者が少なかったため、統計的な分析を用いずに定量的な分析から傾向を見出すにとどめた。自由記述の回答は計量テキスト分析（樋口, 2004）を行い、分析にはKHCoder ver.2 b 30 c（樋口, 2004）を用いた。分析の際の形態素解析にはMeCab(ver.996)（T. Kudo, K. Yamamoto, & Y. Matsumoto, 2004）を用い、コーパス辞書はIPA辞書を用いた。

結果と報告

戸別訪問プログラム（バラ作戦）

回収された質問紙から回答者年代は、多いほうから50歳代7名、60歳代が6名、70歳代3名、30歳代3名、80歳代2名、90歳代2名、20歳代1名、10歳代1名であった。また、性別は女性15名、男性10名であり、男性の回答者は2/3を占めた。

性別差について、他の支援活動の参加者の性別比（講演会：男女比は1:13、食事会：男女比は3:14）に比べて男性の比率が高く、支援活動への潜在的な関心の高さがうかがえた。

支援活動としての「バラ作戦」「食事会」に関する感想：「バラ作戦」や「食事会」など支援活動に対する肯定的な感想が、ほぼすべての年代から寄せられた（Table.3）。被災者だけでなく、一人暮らしや高齢者世代の方からは、「訪問」自体を肯定的に評価する声があった。

一方で、バラ配布や食事会に関する不満や抵抗感を示す記述も寄せられた（Table.4）。

Table. 3 年代ごとの内容の特徴

年代 (人数：割合)	内容の特徴
20～30歳代 (4名：16.0%)	<ul style="list-style-type: none"> ・バラ配布や食事会への抵抗感・不満が多く記述されていた。 ・バラに関する肯定的な感想とともに、感謝の気持が記述されるものもあった。
例：	<p>・会場に行った際、「中にどうぞ」だけではなく、食事や遊びの説明をきちんと欲しかったです。あと、ピザも食べたかったです。(すみません、ずうずうしくて[汗])。あれは学生さん用だったのですか？学生さん(女性)に子供がとってもやさしくして頂きとっても楽しかったといっていました。大人ものんびり過ごせて、お腹いっぱいでもとても良い時間でした。</p> <p>・心のもったバラを有り難うございます。花を見ると、一瞬華やき、日常を忘れるような気がします。田野畑村の人たちに必要なことは、一瞬でも非日常の気分を味わうことではないかと、最近感じています。日々の生活の中で様々な出来事があり、乗り越えていくためにも美しいものを見て、感動することも大切だと思います。施設に入所している高齢者にも、もっと感動する瞬間が訪れることを願っています。来年は高齢者のための作戦も期待しております。</p>
50～60歳代 (13名：52.0%)	<ul style="list-style-type: none"> ・バラに関する肯定的な感想とともに、感謝の気持が記述されていた。 ・「来年も」や「忘れない」など、継続的な支援を期待する言葉が見られた。 ・何らかの病気や喪失体験など、抱え続けている問題の記述が見られた。
例：	<p>・とてもうれしかったです。暑い中ほんとうにありがとうございました。来年も来てくださるなら、来年は仮設住宅を脱出して、新しい家で受け取りたいです。仕事だったので食事会に行けず、残念です。</p> <p>・きれいなバラをありがとうございます。船、漁具、作業場等を失いましたが、家は高台にあったため、残りました。まだまだ大変な事が多いですが、前向きに頑張っていきたいと思っています。学生の皆さんの想いにも感謝しています。津波で四十年来の大切な友人を失いました。毎日海を見て、いつまでも見守っていてね。と声をかけています。</p> <p>・一輪のバラで家の中が明るくなりました。バラの力を信じて頑張ります。これからも田野畑村を応援して下さい。</p>
70～80歳代 (5名：20.0%)	<ul style="list-style-type: none"> ・バラに関する肯定的な感想とともに、感謝の気持が記述されていた。 ・訪問に対する肯定的な感想とともに、感謝の気持が記述されていた。
例：	<p>・キレイなバラの花とメッセージをお届けしていただきまして、ありがとうございました。本当に訪問(留守)していただき嬉しく思っております。感謝感激です。</p> <p>・今年も美しいバラの花、ありがとうございました。テーブルの真ん中で家族みんなの心を癒やしてくれています。皆さんの心暖まるイベントに厚く厚く感謝申し上げます。</p>
90歳代 (2名：8.0%)	<ul style="list-style-type: none"> ・バラに関する肯定的な感想とともに、感謝の気持が記述されていた。 ・食事会に参加できなかったことに対する「お詫び」が記述されていた。 ・何らかの病気や喪失体験など、抱え続けている問題の記述が見られた。
例：	<p>・やさしいバラをありがとうございました。足不自由のため、講演会に出席できず残念です。ご活躍をお祈りします。</p>

Table. 4 バラ配布や食事会に関する不満や抵抗感

年代	内容
20歳代	バラのトゲへの配慮(子供が持つとトゲが刺さる危険)
30歳代	バラ配布中の学生の態度(遊び半分で活動している者がいた)
30歳代	食事会活動中の配慮不足(飲食物のサーブに配慮がなかった)
50歳代	集団での活動への抵抗感(集団で学生が移動していることへの抵抗感)

自由記述内容のカテゴリー分析：郵送式調査の自由記述の内容に対し計量テキスト分析を行い、記述内容のカテゴリー化を行った。

年代ごとの特徴を明らかにするため、回答者の年代を表す名義変数を作成し、頻出語の対応分析を行った。図は最初の2つの成分による同時配置である(Figure. 1)。これらの成分の寄与率は、成分1が22.55%、成分2が18.88%であり、累積寄与率は41.43%であった。結果、50～80歳代は比較的同一のまとまりをもっており、特に50歳代と60歳代が中心部に位置していた。50歳代の周辺に付置する抽出された頻出語には「す

る」「食事」「やさしい」「頑張る」「大変」「生活」「気持ち」があり、前向きな行動への意識や活動によって得られた心理的余裕などがうかがえた。70歳代の周辺に付置する抽出された頻出語には、「感謝」「有り難い」「これから」「すばらしい」「本当に」があり、活動に対する感謝の気持ちが強くうかがえた。

一方で、20歳代・30歳代・80歳代・90歳代は、周辺部に位置した。このことは、20～30歳代、80～90歳代の支援ニーズと50～60歳代のもつ支援ニーズに違いがあることをうかがわせた。

郵送式調査の自由記述の内容に、共通する意味内容がどのように含まれているかを分析するため、自由記述の動詞と名詞を抽出し、共起分析を行った(Figure. 2)。

その結果、支援に対するカテゴリーとして、①バラ(花)や食事は「厚意」として感謝の対象となっていること、②学生の訪問にエンパワメントされたこと、③講演や学生の関わりを労う気持ちなどとともに、田野畑村にある人々の想いのカテゴリーとして、④問題を抱え続けることの苦しさをもつ「被災者」や⑤関係の

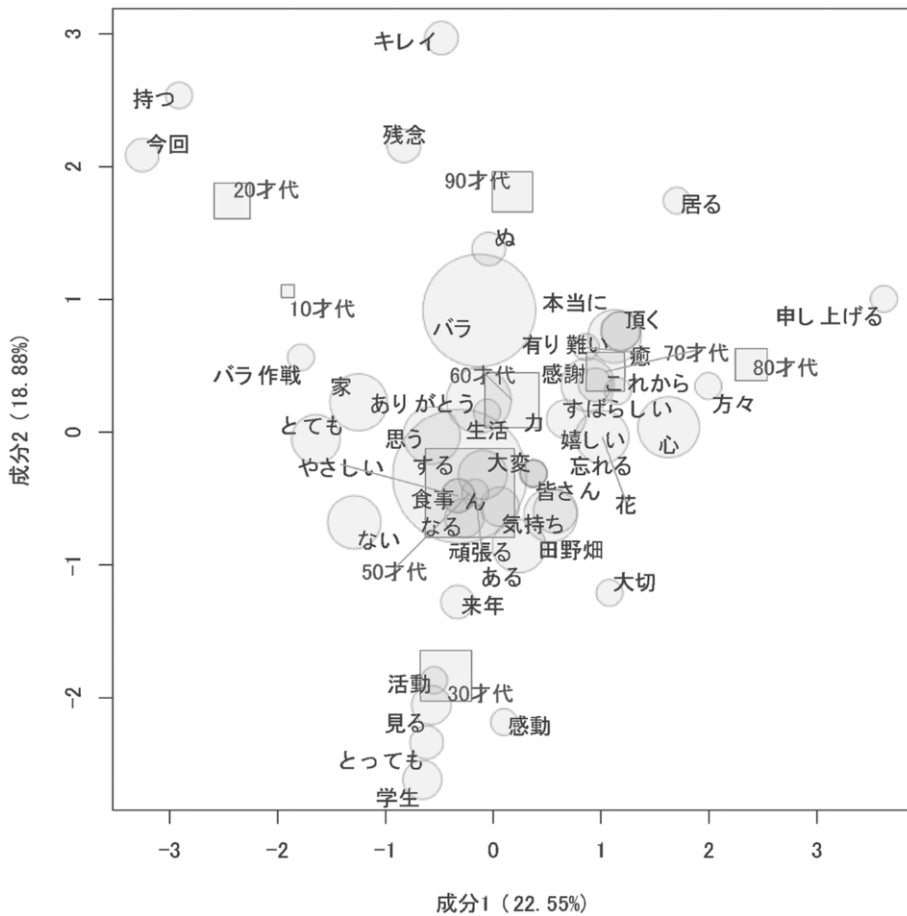


Figure. 1 郵送式調査の自由記述の内容の対応分析

□は年代を表す名義変数，○は抽出された頻出語，大きさは頻出頻度を表す

つなぎ手を求めている「高齢者」，⑥復興の行方を考えている「働き盛り」，⑦津波によって失ったものたちへの想いなど，を見出すことが出来た。

心理教育プログラム（講演会）

回収された質問紙から，参加者の年代は，50歳代が半数，60歳代が1/3を占めた。性別は女性13名，男性1名であった。講演会の内容の満足度については，すべての参加者が肯定的に評価していた。

参加の契機：「講演会」への参加の契機について，複数選択で回答を求めた（Table. 5）。

20～30歳代は，広報や保健センターが契機となっており，またその中には村外からの参加者が含まれていた。50歳代は，広報や保健センターが主な契機となっており，また知人からの声掛けによる参加も含まれていた。このことから社会的なネットワークへのアク

セスが可能で，地域に伝搬させる力を持っていることがうかがえる。60歳代は，パラ配布が契機となってお

Table. 5 講演会の参加者年代と参加契機

年代	回答者	参加契機			
		広報	パラ配布	知人	保健センター
20歳代	1 (5.6%)	1	0	0	1
30歳代	0 (0.0%)	0	0	0	0
40歳代	1 (5.6%)	1	1	0	1
50歳代	5 (27.8%)	3	1	1	2
60歳代	3 (16.7%)	0	3	0	0
70歳代	0 (0.0%)	0	0	0	0
不明	8 (44.4%)	2	6	1	3
計	18	8	11	2	7

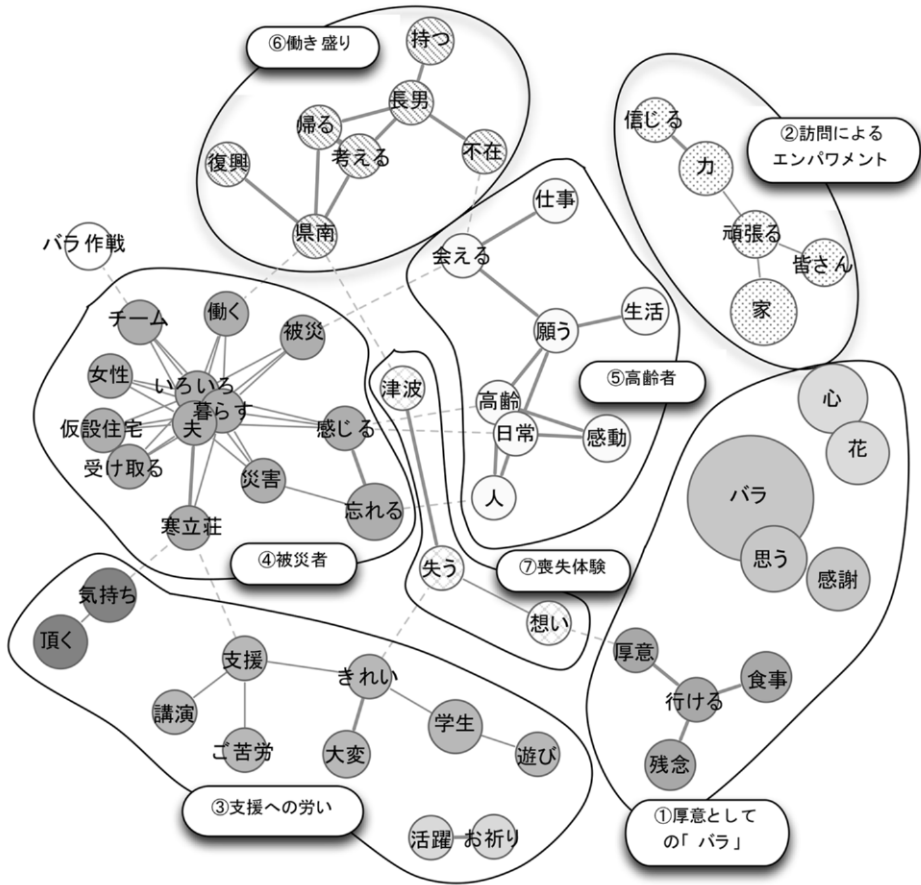


Figure. 2 郵送式調査の自由記述の内容の共起関係 (名詞・動詞)

○は抽出された頻出語、大きさは頻出頻度を表す。
線(—)は相互の関係を表し線が太いほど関係が強い

り、高齢者世代においては、直接的な戸別訪問は支援を届かせるために有効であることがうかがえた。

参加者の居住地域：講演会参加者の居住地域について、回答を求めた (Table. 6)。

最も参加者が多かったのは、村中心部(田野畑・西和野・菅窪・大芦・和野・猿山)で約半数を占めた。また、被災者の多かった沿岸部(島越・羅賀・明戸・机・切牛)からも同数あった。山間部(田代)と村外(善代村・岩泉町)からも少数ではあるが参加者があった。

参加地域の特徴として、講演会会場にアクセスしやすい国道沿いの地域が多く、物理的な障壁が参加の問題として存在する可能性が示唆された。また自由記述などと合わせて検討すると、村外からの参加者は20歳代で、他の地域に支援者として関わっているなど、問

題意識の高い参加者であった。

コミュニティ再建支援(食事会)

回収された質問紙から参加年代は、60歳代が46.2%、70歳代19.2%、40歳代11.5%、50歳代11.5%、20歳代7.7%、30歳代3.8%(不明1名)であった (Table. 7)。性別は女性14名、男性3名(不明1名)であった。

参加の契機：20～30歳代は、広報や知人からの誘いが契機となっていた。50歳代は、広報や保健センターが主な契機となっており、また知人からの声掛けによる参加も含まれていた。社会的なネットワークへのアクセスが可能で、地域に伝搬させる力を持っていることがうかがえる。60歳代は、戸別訪問の「バラ配布」が契機となっており、高齢者世代においては、直接的な

Table. 6 講演会の参加者の居住地域

	村中心部						沿岸部					その他		
	田野畑	西和野	菅窪	大芦	和野	猿山	島越	羅賀	明戸	机	切牛	田代	岩泉町	善代村
20歳代	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
40歳代	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
50歳代	1	1	0	1	1	0	1	1	0	2	0	0	0	0
60歳代	0	2	2	0	0	1	3	2	0	2	0	0	0	0
70歳代	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
不明	2	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0
計	3	5	3	1	1	1	4	3	1	5	1	1	1	1

Table. 7 食事会の参加者年代と参加契機

年代	回答者	参加契機			
		広報	バラ配布	知人	保健センター
20歳代	2 (7.7%)	1	0	1	0
30歳代	1 (3.8%)	1	1	1	0
40歳代	3 (11.5%)	0	2	0	1
50歳代	3 (11.5%)	2	2	1	1
60歳代	12 (46.2%)	3	9	1	2
70歳代	5 (19.2%)	1	4	1	0
不明	1 (3.8%)	0	1	0	0
計	27	8	19	5	4

報告のまとめ

本報告において回収されたデータは、限定的なものにとどまっており、十分な信頼性・妥当性の下に述べることのできる範囲は限られている。

郵送式調査の自由記述の内容分析からは、仮設住宅に避難している住民など被災者にとって、「バラ配布」などの支援活動は、肯定的に評価されており、また支援の継続を期待している。このことは、「来年も...」「忘れないで...」といった記述からも示唆される。また同時に、抱えている問題への対応に苦慮している姿もあり、慢性疾患や経済的な問題などを抱える被災者などが、問題を「抱え続ける」ことの苦しさを記述していることが特徴的であった。

そして、高齢者世代にとっては、被災者と同様に、支援活動を肯定的に評価するとともに、直接的な関わりなどソーシャル・サポートを求めている姿が自由記述の中から見出された。このことは「バラ配布」による戸別訪問自体に勇気づけられていたり、「食事会」において「知人との関わり」に多くの参加者が満足している点からもうかがえる。近親者の死や自身が孤独であることが、被災者と同様の「喪失体験」として体験されていることをうかがわせる。

一方で、働き盛りの子育て世代などでは、支援活動に対してやや侵襲的に感じていることがうかがえた。すでに社会的な関係にもとづく生活があり、移動手段を活用できる住民にとっては、新たな関係性が入り込む支援活動は、自分自身の持っている関係性を侵すような感覚を覚えるのかもしれない。一方で、「食事会」などの活動は、日常からの距離化を図る非日常の体験として評価されていた。

このことは、最も生産性の高いライフステージにいる子育て世代の20～40代にとっては、目の前にある生活をどう生きるか、あるいは子ども世代をどう育てて

戸別訪問は支援を届かせるために有効に機能することが示された。

活動の満足度：「食事会」における活動の満足度を複数選択で回答を求めた (Table. 8)。「食事」は、どの年齢層にも全般的に満足度が高かった。実際の食事の場面でも、地域の伝統食である「きみだんす」や「はちはい汁」が早い段階で完食となっていた。60歳以上の高齢者世代の参加者は、「知人との交流」や「スタッフとの交流」の満足度がやや高い傾向にあった。

Table. 8 食事会の活動の満足度

年代	食事	工作	知人との交流	スタッフとの交流・相談	その他 (大道芸)
20歳代	2	0	0	0	1
30歳代	1	1	0	0	0
40歳代	2	0	0	3	1
50歳代	3	0	2	1	0
60歳代	11	2	4	10	0
70歳代	4	0	4	4	0
不明	0	0	0	1	0
計	23	3	10	19	2

いくかということにより多くのエネルギーを注いでいることと関係しているかもしれない。言い換えれば高齢者世代が自身の人生を振り返り、過去を志向するのに対し、若い年代は現在、そして未来を志向していると言えるかもしれない。

高齢者世代が元に戻る未来を目指しているのに対し、子育て世代が今という現実をどう生き、自分の人生をどう作り直していくかにその焦点があるとすれば、子育て世代にはより現実的で効果の感じられる具体的な支援の提供が求められているという仮説を立てることもでき、それぞれの世代が抱える葛藤に即した支援のありかたを検討する必要があると言える。

引用文献

- 樋口耕一 2004 テキスト型データの計量的分析—2つのアプローチの峻別と統合— 理論と方法, **19**(1), 101-115.
- 喜多佑荘・黒岩 誠・廣池利邦・岩崎弥生・久保朋子 2012 ランチョンセミナー 田野畑村におけるお手伝い. *こころの健康*, **27**(1), 41-52.
- Taku Kudo, Kaoru Yamamoto, Yuji Matsumoto 2004 Applying Conditional Random Fields to Japanese Morphological Analysis, Proceedings of the 2004 Conference on Empirical Methods in Natural Language Processing (EMNLP-2004) 230-237.
- 田村友一・高下 梓・平田 茜 2012 特集東日本大震災と精神衛生 田野畑のいまとこれから. *こころの健康*, **27**(2), 16-20.
- 中村 有・木村淳子・黒岩 誠 2012 「いま, ここで」, 田野畑村が必要とする包括支援. *こころの健康*, **27**(1), 21-25.
- 樋口耕一 2004 テキスト型データの計量的分析—2つのアプローチの峻別と統合— 理論と方法,

The Briefing Report of “Operation Rose” that Psychological support for Reconstruction of Local Community

Development of Program evaluation form An Action research in Disaster-relief Activities in Tanohata, Iwate Prefecture, Japan

TOMO OHASHI (DEPARTMENT OF PSYCHOLOGY, FACULTY OF HUMANITIES, MEISEI UNIVERSITY),

YUICHI TAMURA (MEISEI UNIVERSITY HEALTH INSTITUTE),

YUU NAKAMURA (TOHO UNIVERSITY OHASHI MEDICAL CENTER),

AZUSA TAKASHITA (DEPARTMENT OF PSYCHOLOGY, FACULTY OF HUMANITIES, MEISEI UNIVERSITY) AND

MAKOTO KUROIWA (MEISEI UNIVERSITY HEALTH INSTITUTE, DEPARTMENT OF PSYCHOLOGY, FACULTY OF HUMANITIES, MEISEI UNIVERSITY)

MEISEI UNIVERSITY ANNUAL REPORT ON PSYCHOLOGICAL RESEARCH, 2014, 32, 39-46

Key Words : Disaster-relief Activities, Action research, Program evaluation, Tanohata, Iwate Prefecture